

友をもよんでニナリ

韓国の旅（下）

飛田 雄一

旅の四日目、四月一九日、ちょうど4・19学生革命の三〇周年記念日だ。その日に4・19墓地を訪ねることも今回の旅の目的のひとつだ。

朝八時、泊っている文化旅館にキリスト教研究会の鄭燦成氏が来てくれ、朝食に有名なヘジャングック（解腸汁）を食べに連れていってくれる。世宗文化会館の西のヘジャングック通にあるその中でも有名な店へ。中々の味だった。二日酔には特によいという。また、日本の迎酒のことはヘジャンスル（解腸酒）というということだ。

そして、鍾路書籍に知り合いがいるということで、案内してもらう。友人から頼まれていた本も沢山あり、たいへんだなと思つていが、鄭さんの知り合いに便宜をはかつていただいたお陰で、喫茶店でコーヒーを飲んでいた間にすべて揃い、郵送の手続も終わつた。

感謝の意で、次ぎは、もう一軒の本屋の教

1990.9.30

得して仲村修さんも合流して、四人で昼食。そして、飛田、仲村、朴の三人で墓地へ向つた。

墓地の入口附近には機動隊があり、広場では大学生が思い思いに集会を開いている。奥に進んで記念塔、そして、さらに奥の墓地へ進んだ。土まんじゅうの墓地のいくつかには友人家族が集まり小さな催しをしている。多くの写真、墓、参拝の人々を見て、いまも韓国民衆にとつて4・19が深く刻まれていると感じた。

夜には、墓地にいった三人にハンギヨレ新聞の鄭尚謨記者、ソウル留学中の藤永壯氏を加えて鍾路の裏道を歩いてサムギヨプサル専門店（豚の焼肉だが油と肉が三重になつてるのでそういうとか）にいった。仲村修氏とはまた二次会に行き、結局文化旅館にふたりで泊つた。日本でなら追加料金を払わなければならぬところだが、韓国ではひと部屋の代金七千ウォンを払うとそれ以上払う必要がない。

#

翌二〇日の朝、仲村氏は延世大学へ、私はソウルを後にして、天安の独立記念館に向つた。文化旅館で隣の部屋に泊つていた夫婦も行きたいというので一緒に行った。北海道で脱サラして「どんぐり工房」を開いて木工をしながら非常勤講師もしているといふ二人だ。『地球の歩き方・韓国』を手に旅をする二人だが、『歩き方』に独立記念館のことが載っていないことを憤慨している意識の高い

1990.9.30

四百ウォン。前日に延世大学前の本屋で買った少しややこしい本もいつしょに送つた。時間が迫つてないので光化門郵便局を矢のように(?)飛び出したとき、ぱつたりと関釜フェリーのデンマーク人とあつた。前回（一〇号）に書いた上野公園でヴァイオリンをひいていたという学生である。広い韓国、人多いソウルでのこのよな再会は、宝くじのみの確率だろう。数年前、おなじくソウルの教保文庫で写真でみた信長正義さんの若きペンフレンドの女性に会つた鹿鳴節子さんの確率並、あるいはそれ以上だろう。（写真でしか知らない人に声をかけた鹿鳴さんは比べようもないが……）

午前中まず漢陽大学の尹慶老先生を大学に訪ねる。尹先生は、神戸学生青年センターで五月に開いたシンボジウム「韓国のキリスト教と民族主義」の講演者のひとりだ。「○五人事件と新民会研究」と著書がある。地下鉄の駅から電話をすると車で迎えにきてくださた。城北区の少し小高いところに漢陽大学がある。私が初めて韓国を訪問した一九七八年に、この近くに来たことがある。その時は、日韓都市産業宣教協議会に参加したのだが、会議の後、フィールドトリップで城北区のスラムに来たのだった。当時、許秉燮牧師が地域の労働者のための小さな教会「トンウォル教会」をされていた。短い時間であったが、お話しを伺い、地域を案内していただき、感銘というかショックをうけたものだ。

その許秉燮牧師のことは、昨年、これも学

二人だった。

ムゲンファ号で天安まで行った。韓国の鉄道では一人の車掌が客の座席の番号を読み上げ、もう一人がそれを記録する。釜山からソウルへセマウル号に乗つたとき、女性の車掌が読み上げ偉そうなかっこをしたヒゲの男車掌が記録するというスタイルだった。一人ですりやいいものを女性に読ませるとは、思つてはいけないので、見学もそこそこに再びヤン・ヨンソク氏に連絡をして落ち合う。思つてはいけないので、見学もそこそこに再び

天安の駅前からバスで独立記念館についた。そこの研究員で中国における独立運動を研究されているヤン・ヨンソク氏と会いたいと思つて、天安の駅前からバスで天安駅とばかりして天安駅とば違つて天安駅のバスター・ミナルであることが分かつた。またまたウロウロして礼山行のバスを探すが見当らない。チケット売場で尋ねると、若い女性が向うだと手で合図をするだけ。隣へ行つて尋ねるとまた手で向うだとのこと。少々気が滅入つたが、更に奥にいついろいろ探すと洪城行のバスが礼山を通るようだ。チケットを買って一息つき、やつと昼のうどんを食べて三時十五分発の洪城行に乗つた。乗り過ぎすことのないように乗るときに運転手さんに礼山を通することを確認し、着いたら特別に教えてもらうように頼んでやつと安心してバスに乗り込む。

今回の旅行は、翌日に会う人に前日に電話をして会う時間、場所を決めるというスタイルだが、昼夜、いろんな人の食事をし、移動するというで電話で相手をつかまえるのも大変だった。礼山のバスターミナルの前が丁度、礼山農業専門学校で、約束をしていた同校の洪性賛先生が待ついてくれた。洪先生とは一〇年ほど前、マニラで初めて、神戸学生青年センターも関係しているACTISCA（社会問題に関係しているキリスト教施設の協議会）の会議でお会いした。その後、学生センターに有機農業の視察で村の青年四人を率いてこらたりされ、是非、一度礼山を訪ねたいと思つてはいた。洪先生の車でその日の宿の徳山温泉まで行つて荷物をおき、近くにある「尹奉吉義士記念館」に行つた。

生センターで講演会を開いた李東哲氏からもうかがつた。李東哲氏は、小説家として有名だが、平民政黨の国會議員として昨年の大晦日韓国の全斗煥前大統領の国会質問でもつとも激しく攻撃した議員としても有名だ。発言内容が問題となつたが、光州事件に関連して「人殺しを人殺し」といつて何が問題になるのだ」と話されていた。その李東哲氏が目を開かれ挨拶が続いていた。校舎には、上下一〇メートルはあるようないい闊いの様子を描いたすばらしい絵がかかっている。話してもそこそこに、朴福美さんのまつ高麗大学へむかう。朴福美さんは東京の鐘声の会および現代語学塾のメンバード現在高麗大学に留学中。そもそも4・19墓地に行きたいと思ったのは、朴福美さんが「鐘声通信」に連載中の「アジュマ通信」の墓地を紹介する文章を読んだからである。高麗大学の正門前には大きな横幕がいくつかあり、その中に「4・18精神」というのがある。アレ、4・19ではないのかな、まさか間違うことなど……と、高麗大学卒業の尹先生にうかがうと、當時、高麗大学の学生が決起したのは一日早い四月一八日で、そのことを自負とともに掲げているのだという。納



でもらつたKBS労組争議の号外の写真にあつたソウルでの支援集会でも先頭で韓服をきて座り込んでおられた。

日本のマスコミは当時KBSのストを過小に報道していたと思つ。例えば日本でNHKがあんなに長い期間製作拒否をしたと考えればどんなすごい事態であるが明らかにはずだしかし私は、KBSが過去の番組ばかり流していたので、きれいな山の番組などが観れてよかつたが……。

姜牧師の説教も迫力があつた。旧約聖書創世紀四章にあるアベルとカインの話を題材に「4・19」の話をされた。アベルとカインは兄弟だが、アベルはカインを殺してしまつた「その理由等は紙数の関係で省略」。アベルが神に捧げものをしたとき、神はアベルに「カインはどうしているか」と尋ねられた。姜牧師は、眞に礼拝することの大切さを語つた

後、逮捕されたりした自分自身の4・19の時の体験を話された。そして当時の教会が学生たちとともに闘わなかつたことを批判し、その時、神は「犠牲者たちはどこにいるのかと尋ねられていたし、いまも、政治犯など捕えられている人々がどこにいるのかと問いかげられているという説教だった。小さな教会での印象的な礼拝だった。

全州に来ればやはり「全州ビビンバ」といふことで、中央会館でビビンバを食べ、鄭萬浩氏と分れて一路光州へ。光州では、朝鮮大学で日本語講師をしている青柳さん夫婦と二年前大学生協視察にハンサルリム・モイムの朴才一氏らと神戸に来られた同じく朝鮮大学の全淇燮先生にお会いするため。まず、青柳さんのお宅を訪ね、それから一九八〇年の光州蜂起で有名な朝鮮大学に案内してもらつた。思つていたより建物も学生数も大きな大学でびっくりした。夜は、全先生に魚料理を御馳走になりながら、話がはずんだ。全先生と青柳さんの家が近いというので二次会は青柳氏宅でということで、また夜中遅くまで喋つた。アルコールは入つているし韓国での韓国語の世界が長く続いているので、韓国語がよく分かるしよく喋れる。日本に帰ってきてその流暢さがすぐに失われてしまつたのもしかたのないことであるが……。

動の拠点の一つで、昨年むくげの会の鹿鳴節子さん、センター朝鮮語講座の信長たか子さんらが訪ねたとき、日本の反公害運動活動家たちの講演会ということで彼女らが韓国語で講演をしたところだ。その時は私の洪城の横幕以上に、講演会の横幕をつけたバスが一週間ほど市内を走っていたという。

アジエマたちは発車前にスルメを貰い込む。私も一匹買ってビールでもと思うが、一匹単位では売つてないし、昼からビールなんて!?と買わずにいた。そのアジエマたちは、ひとりで二、三匹のスルメをたいらげるのである。昼食に食べているという風だった。

釜山では、念願のチャガルチ市場で生きたタコのさしみを食べた。日本のタコのように吸盤が大きいものではなく、食べやすい。焼酎で食べるのがツウなんだろうが私はビールを飲んだ。箸でつまむとお皿もひつついくるタコのぶつ切りにはびっくりしながらも食べたが、最後に残った青い目がまだ動いている部分には度胆を抜かれてギブアップした。

釜山では友人の林楓圭さん金大植さんにお世話になり、帰りは飛行機で大阪に帰つてきた。日本で買うよりは安い一年間有効の釜山→大阪→釜山のオーブンチケット(ついでに大阪東京往復も)を買ったので、必ずまた一年以内には韓国へ行かなければならないことになってしまった!!

韓国への初めてのひとり旅は、刺激的かつ勝手気ままなよい旅であった。次回は、江原道、慶尚道の友を訪ねて旅をしよう。(完)

1990-9-30

いしたため講演を断られましたことはもちろん。夕方は観光をさせてもらい、また、翌日は午後には全州を訪ねることになつて、いたので、もう講演会は流れたナアと書んでいた。しかし寝る前に講演会を朝からに変更したから是非してほしいという。しかたなく、夜中ビール頭をかきながら準備した。学生センターの唯一の韓国語のパンフレット『兵庫県における有機農業運動と神戸学生青年センターを中心とした市民運動』(B5、10頁)を読んでみたり、一五、六年前、有機農業運動の初期にカボチャばかりきて困りトラックで売に行つたことなどを思い出したり、いずれにしても漬かりのわるい「一夜漬」だ。

日本人が韓国語で叫んでいたからには仕方ない。たとえば、とにかく約一時間の講演は終わつた。

日本語の野菜^{やさい}は韓国語ではサンナムル（山のナムル）のイメージになるようだ。韓国語でよく蔬菜^{イチヂク}とか菜蔬^{イチヂク}というのがよくきてきてなんのことかよく分からなかつたが、それが野菜に近いという印象だ。

予約していた天安から全州への汽車には乗れなくなつたが、車で群山まで送つてくれた。おかげで西海岸のドライブを楽しめた。錦江は、考えていたより大きな川だつたし、洪城から錦江あたりまでの海岸地帯は海岸添に低い山が続いていて道路から海が余り見えないとかの発見があつた。

たかつた。全州から西へ三、四十分程のところにある開発院に案内してもらい、夜は全北農村問題研究会、キリスト教農民会など五名程の方々と交流をした。

尹奉吉は一九三三年四月二九日、上海虹口公園で日本の天長節祝賀会が開催されたとき陸軍大将・白川義則らを死傷させ、同年一二月一九日処刑された人物だ。私は、尹奉吉が礼山出身であることも知らなかつたが、中国に渡る前に礼山で教育事業に携わつていたこと故郷をするときすでに死を決意する書を残していることなどを教えられた。案内して下さった洪先生は農業経済の専門家だが、「セマウル運動の観点からみた尹奉吉義士の農村振興運動に関する考察」という論文も書かれている。徳修寺にも連れて行つてもらい、夜は以前神戸で会つた人も含めて六人で食事をした。今回の礼山行は、アジアからの研修生を受け入れている神戸にあるPHD協会の草地総主事が、私を日本の有機農業の専門家だと紹介してもらつた。

朝、洪先生と講演会のある洪城へ出かけた。町へ着くと「飛田雄一先生講演会・日本の有機農業運動と産直運動」という横断幕がかかっている。さあ大変だ。洪城は、ブルームー農業高校、信用協同組合、Y M C Aなどが中心となって有機農業運動に関係をもつており、講演会にはこれから運動を始めようという人たちが五〇名程集まつておられた。ほとんどが二〇代の若い人で、五、六〇代の人も少しおられた。冷汗をかきながら韓国語で「講演」をした。農学部出身の私だが、作物の名前など専門用語は全く弱い、まして韓国語でなんというかなど至難の技だ。そんな話しの時は、こんな形の日本語で×××といふのですが、などといつて前列に座つておられる日本語のできそうな老人に聞いてごまかしたりした。

群山から直行バスで全州へ。もう、韓国の直行バスにもなれ、時刻表片手にどこへでも行けそうな自信がついていた。一つの街に二カ所バスターミナルがあることがあるとか、直行バスと経由バスがあるとか、出発時刻と発券のタイミングとか……。でも市内バスは、まだ恐ろしくてだめだ。

全州バスターミナルで鄭萬浩氏に電話をする。鄭氏は、十年ほど前、カトリック農民会の有機農業視察団の一員として神戸に来られたプロテスタンントの農民運動家で、キリスト教農民会、農村開発院、有機農業運動の消費者グループ的な性格ももつ全北農村問題研究会などの仕事をされている。鄭萬浩氏は、その後私が江原道原州の農民運動グループを訪ねたとき遠路、全州から訪ねてきてくれたりした。氏の農村開発院には前々から行つてみ